

チベタン・チルドレンズ・プロジェクト

2012年収支報告書



2012年決算の解説

2012年の決算については前頁の通りです。当期収入合計3,869,634円で、収入全体における項目の割合は、定期サポーター収入67%、任意寄付33%です。これに前期の繰越金が加わり、運営に充分な財源を確保できました。

当期支出の合計は2,249,924円。各支出の割合は、クンデ・ハウス事業が全体の83%、チベット予防医学室が6%、TCP現地事務所が4%、TCP東京事務所が7%を占めます。

チベット予防医学室はわずかながらTCPに還元できる収益を上げられるようになりました。TCPの宿泊施設も、のべ94泊ご利用頂き、74,970円の収益を得ることが出来ました。

ネパールの現地事務所の支出は、すべて税金とネパール産業省の監査費用とそのために弁護士に依頼した書類制作費です。東京事務所の支出は、ネパールの現地施設からの依頼で購入した医薬品などの支援物資、プロバイダの契約更新費、国内郵便の

送料と封筒などの資材代です。現在14名の子どもをお預かりし、生活と教育の全般にわたって養育しているため、今後もクンデ・ハウス事業がTCPの支出の大きな割合を占めることなると思われます。

当期の収支は1,619,710円の黒字となりました。2011年に比べ設備投資が大幅に減少したこと、また活発なご寄付により黒字となりました。ご支援いただきました皆様に、改めましてこの場をお借りして御礼申し上げます。

大幅な黒字で終えることが出来た2012年ですが、ネパールの不安定な政治状況を思うと、いつ何時、ネパールから一時的にインドに避難する様な事態が発生しないとも限りません。また長期的にはネパールでの不動産の取得を視野に入れて活動しておりますので、今後も毎会計ごとに黒字を積み重ねて行けるように努力いたします。長い視点でご支援を頂きたく、お願ひ申し上げます。

2012年運営の報告

2012年の運営を振り返り、解説を加えたいと思います。

1年間の主な出来事を右にまとめてみました。

●運営上の問題点

2012年の運営上、最も問題であったのがクンデ・ハウスの常住スタッフの不在です。2011年11月に2年半にわたって、クンデ・ハウス専属スタッフとして活躍してくれたクンチョック夫妻が退職して以後、二組の夫婦を採用しましたが、いずれも旦那さんの飲酒とそれに起因する暴力が原因で、強制解雇しました。面接の時には全く飲酒をしないと話していましたが、いずれも隠れて酒を常飲し、時に正体を失って暴れ暴言を吐き、更生のための話し合いも成り立たないため強制解雇しました。残念ながら難民の中には、青年は薬におぼれ、中年は酒に溺れている者も多いのが実情です。子ども達にとって父親、母親としての役割を担ってもらいたいとの思いから、クンデ・ハウス専属スタッフは夫婦で採用することを基本とし、多くの夫婦を面接しましたが、いずれもTCPのスタッフに迎えるには様々な問題があり、採用には至りませんでした。

理想にこだわり過ぎては運営が立ち行かないため、致し方なく単身者のスタッフも合せて探すことになりました。全くの他人を受け入れるのはリスクが高いため、アムチの親族やお寺関係から推薦された方を面談しましたが、いずれも住み込みで長期的に働くには条件が整わず、採用とはなりませんでした。専属スタッフ不在のため、アムチと加藤には多くの負担を強いた運営となりました。

2012年の主な出来事

- 1月 クンデ・ハウス常住スタッフ不在
(～12月)
- 7月 チベット予防医学室分室を開院
- 9月 プルパ・サンモがクンデ・ハウスを退去
- 10月 NGO 取得
- 12月 チベット予防医学室分室を閉鎖

最終的に年末になってアムチの親族の紹介で1年前まで尼僧で現在は還俗したイシ・チュドゥンを採用する事になりました。採用の要因は幾つかありますが、一番大きな決め手は正直で実行力があることです。残念ながら今回の採用を通して学んだことは、嘘をつかないチベット人は、今のネパールでは大変貴重な人材であるということです。この点に関して詳細は割愛しますが、アムチでさえ長らく付き合ってきたチベット人の親友に手ひどく裏切られ、莫大な未払い金を抱えているのが現状です。難民というマイノリティーであるが故の教育の不足と将来に対する希望の欠如が、このように目先のことだけにとらわれてしまうチベット人を作ってしまっています。

誇り高く本当の自信を備えた人材をクンデ・ハウスで安定して育成するためにも、まず今後は、イシが長期に渡って運営に主体的に関わり活動してくれる意識を、育てたいと思います。

◆ クンデ・ハウスの退去問題

心情の上で最もダメージの大きかった出来事は、プルパ・サンモの退去でした。この経緯は既にサポーターの皆様にはご報告しておりますが、運営報告書は将来にわたっての記録という側面も備えておりますので、今一度ここにその経緯を記載させて頂きます。

2010年4月に3歳10ヶ月でクンデ・ハウスに入居したプルパ・サンモは、2012年9月6日、実母が引き取ることになりました。もともとプルパ・サンモは、ネパールで生まれた難民2世であり、TCPは本土から来た難民の支援をする組織であるため、受け入れをお断りしました。しかし、生活環境を総合的に審査して、現段階での保護がなければ子どもの生命が危険と判断し、特別に入居することになりました。このような場合、子どもが労働可能な年齢に達した途端、子どもの返還を求められるケースも多いため、「18歳に達するまで、子どもの返還を要求しないこと」などを何度も確認し、最終的にTCPが製作した誓約書に母親が同意のサインをして入居となりました。

入居から1年が経過した頃、母親の生活環境が変化した事によって、子どもの返還を求めてくるようになりました。しかしながら、子どもの養育に責任を負える状態とは思えませんでした。その後も何度もTCPを尋ねては返還を求めて泣き崩れるばかりで、子どもの将来や今後の生活について、信頼にたる具体的な約束を示せない状況が続きました。

長らくこのような状態が繰り返され、この状況では何も前進しないと判断したスタッフが、3日間だけプルパ・サンモを母親の元に戻しました。プルパ・サンモは「クンデ・ハウスに帰りたい」と3日間泣き続けたそうです。残念なことにこのプルパ・サンモの態度が母親に「子どもが自分に懐かないのはTCPのせいだ」という思考を生み出させ、そこからTCPへの激しい攻撃が始まりました。

◆ NGO 所得

プロジェクトとしての最も大きな変化は、10月にNGOを取得したことです。これにより設立当初よりの目標であった、責任者をチベット人に移管することが出来ました。もともと生活のためにTCPと提携したアムチでしたが（この詳細は2011年の運営報告書に詳しく紹介しております）、現在ではTCPを一生の仕事と位置づけ、尽力してくれています。取得完了の際のお知らせでもお伝えしておりますが、NGOのプロジェクト名は登録上「Twinkle Children's Program」となっています。これは現在ネパールでは「チベット」と名前を冠したもの、それに類するものに対して、NGOの認可を下ろすことが出来ないとの指導によるものです。また運営実態が、プロジェクト（Project）というにはあまりにも小規模であるとの指導を受け、こちらはプログラム（Program）に改めるようにとの指導を合せて受けました。しかしこれはあくまでも登録上の仮の名前との

母親に「子どもを無理やり剥ぎ取られた」と嘘を吹き込まれた十数人のチベット人がTCPに乗り込み、数時間にわたって「子どもを返せ」「人さらい」と罵倒するということが、何度も起こりました。



そして9月6日には、クンデ・ハウスの子ども達の通う学校に無許可で十数名が乱入し、プルパ・サンモを力ずくで奪還しようとする事件が起きました。学校側に排除された人々は、その後TCPに乗り込み、口汚くののしり、騒ぎ立てました。

このような騒ぎは、9月に入って連日のように起こっており、何度も騒ぎを起こしては、今後の運営にも関わると判断したアムチが最終的に、プルパ・サンモを母親に返すことを決定しました。

プルパ・サンモは最後まで、クンデ・ハウスを離れたくないと言っていました。何よりも本人がクンデ・ハウスに残りたいという意思であるのに、実母であるために、引き渡さざるを得なかったことが、スタッフとしては大変つらい決断でした。また、これまで可愛がってくださった里親さんに対して、大変申し訳ない思いでした。

1ヵ月後、母親の洋服の裾をつかんで立っているプルパ・サンモの姿を、街中で見かけました。あの日以来、学校も退学になったままでした。遠目に見ても、とても肌が浅黒くなっているのが明らかでした。シャワーを浴びさせてもらっていない様子でした。プルパ・サンモの退去直後は、スタッフも気持ちの整理がつかず、何とか帰ってきてはしないかとの希望を捨て切れませんでしたが、気持ちを切替え、母親とプルパ・サンモの生活が充実したものとなるように、遠くから祈りたいと思います。



位置づけで、今後もプロジェクト自体は「Tibetan Children's Project」と名乗って運営して参ります。

● 運営目標の検証

2012年の運営目標としておりました「収益部門の充実」は、実行できたものと出来ないものがありました。チベット予防医学室の患者数の増加は、先にも述べた理由で2012年には大幅な減少という結果となりました。また代表によるチベット仏教入門講座は、スタッフの不足により開催できない状態でした。宿泊施設の運営に関しては、のべ94泊の収益として74,970円の収入がありました。運営全体において、何よりもスタッフの不足が響き、そのような中でどうしても子ども達の生活の維持が最優先されましたので、他の活動が弱まってしまいました。



● その他のご報告

2012年4月発売の読売KODOMO新聞に当プロジェクトが大きく紹介されました。チベット難民の存在を子ども達に伝える内容で、一時のチベットに関する偏向報道から考えると、話題として取り上げて頂けること自体、ありがたいことでした。

このほかにテレビ取材のお話もありましたが、打ち合わせの結果、娯楽色が強く打ち出された番組になりそうでしたのでお断りをいたしました。メディアへの露出は、知名度が上がると同時に様々なリスクも負うと考えております。今後も、チベット問題を正しく理解し、誠実な打ち合わせをして頂ける媒体だけを選んで取材に応じたいと思っております。

UN関連の組織で働く在ネパールの方の推薦で、アメリカ人短期留学生の受け入れ先としてTCPにお話がありました。子ども達の英語教育の刺激にもなり、宿泊する施設もあるので、お話を積極的に進めさせて頂きましたが。最終的に12月に行なわれた施設の視察で、とても良い施設との評価を得ましたが、想定していたよりも規模が小さいとの理由で最終的に成立しませんでした。

ニューヨークに支援の拠点を持ち、チベットのナンチェン地区に病院と医学学校の建設を推進しているデモ寺院（The Pal Demo Tashi Choeling Monastery）より、アムチの製作するチベット薬

チベット予防医学室は、患者様の要望で、利便性の良いスワンブナートのコルラ道に面した場所に8月に分室を開設いたしましたが、以前より噂のあった道路拡張が決定し、貸借していた建物の取り壊しが決定したため、12月をもって閉鎖することになりました。多い年にはのべ2,500名をこえる患者さんを診察しておりましたが、本年は分室の営業が短期間であったこと、ケンデ・ハウス専属スタッフの不在でアムチにプロジェクト運営の負担がかかり治療に専念できなかったこと、アムチの体調が長期に渡って優れなかったことなどが影響して、患者さんの数が500名を切ってしまいました。そのような中でも、本院の薬湯治療で収益を得ることが出来るようになりました。薬湯施設はスワンブナートでは唯一のものですので、今後は告知を積極的に行なうことによって薬湯の知名度を上げ、利用者の増加を図りたいと考えています。また便利な立地が、患者が数を増やす最も有効な手段であることは間違いないので、アムチと相談しながら閉鎖した分室に代わる場所を探したいと考えています。

2011年に引き続き、トレーニングセンター事業は休止となりました。ニーズの変化に伴って、新しい職業訓練の講座について現在、企画中です。具体化に関しては様々な問題もあり、まだ実施できる目処は立っておりませんが、難民の自立のために必要な方法を探って行きたいと思います。

とお香を定期的に大量発注したいとのお話をきました。デモ寺院は資金力もあり、大変活動的な組織です。アムチの薬の製作技術の高さは様々な場所で評判になっており、その話を聞いた寺院から連絡があり、2012年秋にTCPに視察にお見えになりました。発注規模は、毎年300～500kgとのことです。現在のところ、薬事法と輸出に関して様々な問題があるため、輸出の具体的な目処は立っておりませんが、製薬技術の伝承のためにも、大量受注のルートは是非確立したいと考えております。



グンゼ株式会社様が CSR(企業の社会的責任)の一環として取り組まれている「グンゼラブアース俱楽部」の支援先の候補に、TCPをご推薦頂きました。小さいながらも活動が明瞭との評価を頂き、担当者様よりほぼ内定したとのご報告を受けておりましたが、最終的な決議において、代表の仏教入門講座が「宗教活動」であるとのご判断で、残念ながら支援先には選ばれませんでした。

以前も会員サポーター様より、お勤め先の大手企業様の社会貢献活動事業に推薦しようと思いますが如何でしょうかとのお話を頂いておりましたが、この時には TCP が「チベット支援団体」であることが様々に勝手な誤解を受け（世の中にはチベットと名前がつくだけで、それが政治色や特定の偏った思想を持つと理解される方が、残念ながらまだいらっしゃいます）企業様と推薦者様にご迷惑が掛るようなことがあってはと危惧し、その時にはしばらく様子を見たいと申し上げました。

今回の推薦者は、グンゼに勤務している東京事務所の石川の高校時代からの友人で、不利益などが発生する可能性も承知の上で、それでも推薦したいとの事でしたので、企業の担当者様とも最初によくお話をさせていただいた上で推して頂き、ご奮闘いただいたのですが上記の判断となりました。

歴史的な背景もあり、日本は宗教活動に関して少し過剰な反応をしあがめているようにも思えるのですが、企業体として最大限リスクを回避するのは当然のことですので、グンゼ株式会社様の決定も致し方ない事と思います。日本の企業は、生産や販売の拠点を中国に置いたり、取引先として何らか中国が絡んでいる場合も多いので、企業の社会貢献事業には、正直なところ TCP は選ばれにくいと考えております。このことを踏まえた上で、何らかの組織の公の支援に応募する道筋があれば、今後もエントリーを考えたいと思います。

2013年1月現在のサポーター会員は、里親サポーター14名、月間サポーター24名、年間サポーター17名です。新しく1月に迎えたクンガ・ラモも里親をお引き受け下さる方がいてください、大変ありがとうございます。皆様のご支援に、改めて感謝を申し上げます。



2012年のネパールの物価は、手元の記録から計算すると、食料、エネルギーともに前年比約130%の上昇です。為替はTCPの1年間の円→ネパールルピーの換金レートの平均が、2011年は0.88に対して、2012年は1.08です。

チベット予防医学室のアムチ、現地統括責任者の加藤ちあきにに関しては、TCPより給与は支給しておりません。また東京事務所も、一切の活動を無償のボランティアで運営しております。これは各人の「TCPは一切が菩薩行」という仏教的な動機によるものです。

無償のスタッフも、運営自体には大きな責任を負って仕事をしておりますので、よりよい運営のためにも、ぜひ忌憚のないご意見をお寄せ下さい。TCPは熱意で行動することから始まった組織であり、スタッフは社会福祉事業に特化したスキルを持っている訳ではありません。そのため至らない部分も多いと思います。今後もぜひ、皆様のご指導を賜りたいと思っております。

2013年の運営方針

2013年の運営は、下記の項目に力を入れたいと思います。

- ①組織の強化
- ②子ども達の教育の充実

①は2012年において、日常の運営にも手が足りない状況でしたので、2013年はまずスタッフの教育と定着を含めた現地運営の基礎をしっかりと固めたいと思います。このため本年は大きく拡大路線はとらず、現地での収入部門は2012年レベルを維持したいと考えております。

②は2012年の経験から、強く必要性を感じました。スタッフの採用やブルパ・サンモの退去を通して、道徳心が低く理性的な判断力に乏しいチベット人に接し、これらの問題の根本は、長くチベットの置かれた不遇な状況の犠牲となって教育を受ける機会さえ与えられないことから来る広い意味での無知なのだと考えに至りました。教養を身につけ、広い視野と人格を兼ね備えた人材を育てるためにも、子ども達の教育への投資は惜しまずにして行きたいと思っております。

その具体的な方策として本年4月、成績優秀な子どもから順次、本人の希望を勘案して私立の学校に転校させたいと考え、既に具体的な学校の選定に入っています。これまで子ども達を亡命政府の学校ナムギャル・スクールに通学させてきたのは、チベット語が堪能な人材に育てたいとの思いからでした。

しかしながら実際、ナムギャル・スクールの学力は他の学校に比べて低く、転校に関しては長らく悩んできた問題でした。正直なところ現在の学校には、教師の能力と責任感の不足など問題点も多く見受けられ、また成績優秀なクンデ・ハウスの子ども達のへの学校側の著しく不利益な扱いなど（不利益な扱いの例として具体的には、成績上位3名は自動的に翌年飛び進級するシステムですが、これがクンデ・ハウスの子ども達にだけ適用されません。このことを教育委員会に訴えると、子ども達はいわば学校に人質にとられているのだから、子ども達の不利益にならないように訴えを取り下げるべきとの指導でした）学校側への不満も多くあり、子ども達の教育を長期的に考えた結果、思い切った決断をすべきとの考えに至りました。

ただし、成績の良い私立学校のほとんどは授業が全て英語です。これまで基本的にチベット語で教育を受け、英語の授業は少しあなたがた子ども達が果たして転校先で授業について行けるのかなど、



不安要素もありますが、まずは学業が優秀でやる気があり、本人が転校を希望している数名をこの4月に転校させる方向で、現在検討しています。具体的な進学先は、個別に里親さんとご連絡いたします。

私立の授業料は、公立学校の教師の給料を上回るような高額な値段なのですが、プロジェクト全体のバランスを見ながら、なるべく子ども達の教育には投資を惜しまないようにしたいと考えております。



昨年の運営報告書でお願いした、サポーター様のご見学の際の物資の持ち込みに関しまして、皆様のご理解とご協力を賜り、ありがとうございました。2013年も引き続きクンデ・ハウスにおいては、モノは必要なときに必要なだけしか与えないということを徹底して行きたいと考えております。支援に依存した体質を作らないため、子ども達の安全のため（持ち物が人並み以上であることは、ネパールでは様々な危険をもたらします）本年もご協力をお願いいたします。

昨年、複数のサポーター様からサポート会費振込み停止、減額のお申し出がありました。東日本大震災など、より身近な問題に寄付を寄せたいなど、どなたも熟慮の末に出された建設的なお話を。



その際に、皆様が申し訳なく思われていることが、スタッフとしては大変心苦しいかったです。領土、民族、エネルギー、環境、様々な既得権益…など世の中にはたくさんの問題があります。それが一番身近である問題、関心のある出来事に関わって行くことが、ひいては世の中全体を幸せにするものとTCPは考えています。支援先を変えられる事に対して、どうぞお気持ちを重くされることはありませんようにお願いいたします。知名度も立派な後ろ盾もない小さな組織を信頼し、これまで応援して下さったことは、今後も何にも変えがたい財産としてTCPの中で育って行くと思います。資金という形でなくても、関心を持ち続けること、ツイッターでつぶやくこと、強い日本経済の構築のために真面目に働くこと、そのどれもが支援の一部だと思います。日本の景気の動向も、世界経済も明るい兆しのない現在です。サポーター様おひとりお一人の健全な暮らしがあってこそその支援ですので、今後も皆様にご無理がございませんように、お願い申し上げます。

ネパールの街中は中国製のものであふれ、ネパール政府の媚中政策もますます露骨になっています。チベットからは抗議の焼身自殺が絶えることなく伝えられ、チベット難民達は閉塞感であふれています。

このような中にあっても希望を失わず、正しい動機を活動の中心に据えて、各人が自分の持ち場で力を尽くして責任を果たすことに勤め、2013年も前向きな気持ちで着実にプロジェクトを推進して行きたいと思っております。